

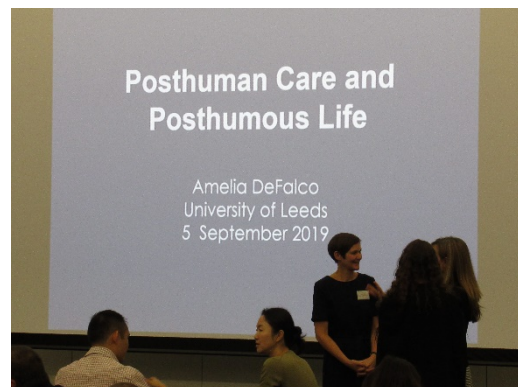
## 国際シンポジウム(“Age, Illness, Care in Literary and Cultural Narratives”)報告

老い、病い、障害や介護についての研究は医学、政策、社会学などの分野で長く行われてきました。ですが、近年は人文科学分野においても関心が高まっています。理論的取り組みや方法論において学際的な研究が多く、老年学(gerontology)や障害学(disability studies)などと深く関連しています。本シンポジウムも、この流れに位置付けられます。この企画は、



迫が科研費の補助を受けるプロジェクト“Ageing and Illness in British and Japanese Children's Picturebooks 1950-2000: Historical and Cross-Cultural Perspectives”(17KK0030)の研究活動の一部で、共同研究者であるサラ・ファルカス氏と共催しました。ファルカス氏の所属先であるハダースフィールド大学(イギリス)において、内容の充実したプログラムが二日間に渡って展開されました。

プログラムの目玉は、テーマも内容も様々な三つの基調講演でした。講演者は、現代文学・文化を対象とする研究において先駆者といえる研究者です。アメリア・デファルコ氏(イギリス・リーズ大学)の講演は、人工知能ロボットが登場する小説と映画を題材に、ポストヒューマニズムの視点からケアの倫理について問いかける内容でした。方法論の面において、文学・文化的語りが哲学的な問いの模索の助けになることを示す研究発表で、本シンポジウムのテーマに強く呼応するものでした。サリー・チバース氏(カナダ・トロント大学)は、福祉サービスの民間商品化が進む今日、「友情」がいかなる意味や役割をもちうるかを問いかけました。その一部として、彼女自身が参加する多国間プロジェクト(ボランティアの若い人が身寄りのない老年者の「友達」になるという取り組みで、社会問題化する老年者の孤独化解消を目指すもの)を、批評的視点も含めて紹介されました。マーガレット・ガレット氏(アメリカ・ブ





サリー・チバース氏

ランディース大学)は、配偶者を介護する二人の老年女性の手紙のやりとりを創作し、感情豊かに読み上げました。この創作の意図は、配偶者を介護する老年女性の存在と経験を広く認識してもらうことで、一般読者に向けて出版したいとのことでした。シンポジウム会場とボストン中のガレットさんをスカイプで結ぶ試みでしたが、ユーモアも交えたガレットさんの講演は臨場感たっぷりで、熱心な質疑応答が続きました。出席者からは、研究を「書く」意味と方法について考えさせられたというコメントがありました。まさに、学問的研究をいかに効果的に社会に還元するか、というとても重要な問題を提起する講演でした。

11のパネルでは、文学、映画、演劇などのテキスト分析に基づく研究から、介護施設における実践的研究まで、多様な内容の研究が報告されました。加えて、世界的に著名なカナダ人作家マーガレット・アトウッドの短編(“Torching the Dusties”)の映画化作品の上映もありました。

さらに、この映画作品製作者で文学研究者のマーレーン・ゴールドマン氏(カナダ・トロント大学)による質疑応答(スカイプ)が続き、多数の質問が寄せられました。

上述のように、老い、障害、病いに関連した研究が複数分野で発達しています。その結果、大規模な学術集会では、研究報告もあまりに多様で、実りある研究交流が難しいことがしばしばあります。そこで、本シンポジウムは、焦点をあえて文学・文化研究に狭めて企画しました。その結果、関心を深く共有する参加者が、イギリス、ドイツ、スウェーデン、スペイン、カナダなどから45名集まりました。食事・休憩中も研究交流が盛んに行われ、参加者にとっては、大変有意義なイベントとなりました。関連分野における今後の研究発展にも寄与するのではないかと期待します。



マーガレット・ガレット氏

ハダースフィールド大学のウェブサイト上でも本企画が紹介されました。

<https://www.huddersfield.ac.uk/news/2019/september/ageing-illness-care-in-cultural-and-literary-huddersfield/>